

平成 25 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」

共同利用報告書の研究成果報告書

「ユーゴスラヴィアの都市と美術について」

世田谷美術館 嶋田紗千

世田谷美術館が所蔵する作品の画家イヴァン・ゲネラリッチ(1914-1992)は、農業をしながら、独学で絵画を制作したユーゴスラヴィアの画家で、ナイーヴ・アートという分野で語られる。ゲネラリッチは、10 代後半から 20 代まで建築家や画家、彫刻家からなる総合芸術集団「グループ・ゼムリャ」に属し、ザグレブ（ユーゴスラヴィア王国の主要都市で現クロアチア共和国の首都）とベオグラード（同王国および現セルビア共和国の首都）で展覧会活動を行い、その後、終生過ごしたフレビネ村（クロアチアの農村）を拠点にその周辺の農民造形家たちと「フレビネ派」というグループを結成する。そして、その発表の場を国内のみならず、東欧諸国の都市（モスクワ、レニングラード、クラクフ、ワルシャワ、ブラティスラヴァ、プラハ）にもつ。このようなローカルな世界で活動していた農民画家たちがなぜ国外に発表の場をもつことができたのかという問題が浮かび上がった。

その上で、明らかになったのが一人の美術批評家オト・ビハリ・メリン（1904-1993）である。彼は、現在のベオグラードに生まれ、1920 年代にベルリンへ留学、第二次世界大戦中は西欧都市（パリ、チューリッヒ）で亡命生活を送り、その後、ベオグラードに拠点を移しながらも国内外で活躍する。ユーゴスラヴィアが立憲君主制から社会主義へ国の体制が移行していく時代に、彼はユーゴスラヴィア出身の芸術家の展覧会を開催し、また、アヴァンギャルド芸術、ナイーヴ・アート、社会主義芸術に至るユーゴスラヴィア近代美術史について複数の言語に翻訳される著書を多数出版する。彼の活動の足跡を追いながら、ユーゴスラヴィア美術、主にナイーヴ・アートが西欧諸国でどのように捉えられたのかを都市と美術という観点から検証する。本研究は、論文として『世田谷美術館紀要』（2014 年刊行予定）に収録する予定である。

スラブ研究センターでの滞在中は、スラブ研究をしている他分野の研究者と懇談する機会に恵まれ、大変刺激になりました。また、スラブ研究センター並びに北海道大学図書館で貴重な資料を目の当たりにでき、充実した滞在となりました。最後に滞在に関して様々なご支援をいただいたセンターの方々へ感謝申し上げます。